

■研究調査レビュー

シマウタのエラボレーション

西元 久明 (鹿児島大学大学院人文社会科学研究科)

1. 本土で聴くシマウタ

去る9月18日、鹿児島市民文化ホールにて「鹿児島在住奄美しまうたの祭典」が開かれた。開演の二時間も前から、ロビーには百名近い会衆が集まり、開場の数十分前にはよりよい席を求めようと中、高齢者の行列ができる。今年の奄美復帰50周年を記念してはじまったこのコンサートは、今回でまだ2回目をかぞえるのみであるが、すでに来年度の日時や場所も決定していることから、鹿児島県本土在住のシマウタ愛好者らの大舞台となりつつあるとあって過言ではない。

今回のプログラムは琉球の古典舞踊「かぎやで風節」にはじまり、参加者全員のウタと三味線による新民謡「島育ち」、そして奄美の挨拶ウタ「朝花節」からシマウタのオンパレード、特に好評を博したゲストの築地俊造氏自作の「新シマウタ」ともいうべき「兄弟つぐわ」やシマ口（方言）漫談、そして三時間を越すコンサートの最後は「六調」で締めくくられる。九百名収容のホールは七割が埋まり、そのほとんどが奄美出身者である。

近年、全国的に注目され、本土で大々的なコンサートも開かれる奄美のシマウタであるが、そのきっかけをつくったのが元ちとせであることは、奄美の高齢者をも含む奄美内外の多くの人々が認めている。

2. 音のアイデンティティ

かつて1920年代から40年代に出版された奄美出身の知識人らの著作に強調された言説は、奄美のシマウタの一般的なイメージを固定化し続け、現在でも語られている。つまり、シマウタの哀調は薩摩藩による奄美への圧政

のためというものである。一方で1953年の本土復帰後、大阪や東京に移住した奄美出身者たちは、韓国、朝鮮系の人々同様、激しい差別にさらされることもあった。差別を恐れ、レコード・プレイヤーを抱き、布団に潜り込んでシマウタを聴くことさえもあったという。そのなかにあって現在、元やその先駆者たち、時代をさかのぼればRIKKI(中野律紀)、当原ミツヨ、築地俊造らの、全国的な民謡コンクールである「日本民謡大賞」(それぞれ受賞年は1990, 89, 79年)の受賞は、シマウタを通して奄美の人々が自らのアイデンティティをポジティブに再認識する契機となった。現在、「日本民謡大賞」は行われていないものの、奄美大島での「奄美民謡大賞」の隆盛や、「鹿児島県民謡王座決定戦」での奄美出身者の躍進は続いている。その裾野にはどのような音楽環境があるのか、シマウタとそれを取り巻く環境はどのように変化してきたのか概観したい。

3. 「生活の語り」から「芸能」へ

周知のとおり、奄美において「シマ」とは「島」ではなく「集落」の意味である。海と山に囲まれる地理的特徴をもつ奄美のシマは、シマごとに方言が微妙に異なり、そのイントネーションが異なれば、同じウタでも節回しが変わる。ウタ者の坪山豊氏によればシマウタとは、音楽というよりはむしろ「生活の語り」であるという。それは海と山に囲まれて世界が完結するシマの生活を越え、ウタウ者、個々人の内面の表出である。楽譜をもつ琉球の三味線音楽とは対照的に、奄美のシマウタは伝統的に楽譜をもたないことも含め、

即興やウタ掛けが発達した所以であろう。そのシマウタの世界に変化が訪れるのは本土復帰以降である。

奄美の内外において伝統的な音楽文化の発信拠点として認められているセントラル楽器がシマウタの録音、販売を始めるのが1956年、創業者の指宿良彦氏は徳之島の亀津出身で、祖母がウタっていた「亀津朝花節」を再現したいというのがきっかけであった。外国製のレコーダーでの録音は、犬の鳴き声や汽笛まで拾い、納得できるものではなかったという。そのため時には山裾での録音もしばしばであった。「なつかしさ」といわれる奄美独自の美的基準をもとに選ばれたウタ者によるレコードは、島外への集団就職の応援歌としても需要があった。62年、63年には名瀬市でNHKのラジオとテレビの放送が始まり、指宿氏によれば奄美の娯楽の質が大きく変わったという。つまり、ウタ遊びのような参加型の娯楽から受身的な娯楽への変化である。それは島外への視野が広がる代償として、足元の文化を見失い始めることであった。72年には「奄美民謡大会」がスタートし、それまで「生活の語り」であったシマウタの舞台芸術化の始まりである。その3年後から開かれるコンクール「奄美民謡新人大会」が、シマウタの底辺拡大と普及促進を目的としていることは「本土並み」を追求してきた奄美の光と、地域文化の喪失という影を象徴するのではないか。もはや若年層にとってシマウタは、シマ口の保存場所として転換されたままであり、それはいまでも変わっていない。

「奄美民謡新人大会」はその後、「奄美民謡大賞」として「鹿児島県民謡王座決定戦」、「日本民謡大賞」と連結し、シマウタが全国的に飛躍する契機となる。

4. エラボレーションの影

シマウタという地域文化の録音、販売と奄美内外での拡大する需要、コンクールの隆盛、

大都市圏でのコンサートと華々しい脚光を浴びる現在のシマウタの世界であるが、一方で、「生活の語り」であったはずのシマウタが、美的基準を固定化されるエラボレーション（洗練化）へとつながっていった。コンクールのもつ権威はシマウタから「生活の語り」を乖離させ、伝統的な歌詞がウタ遊びで培われてきた即興性を低下させる。高い評価を得るために、「生活の語り」ではない遅いテンポでウタわれ、そのため哀調も増す。これに鑑みて、シマウタを「聴かせる」ウタ者と「聴く」聴衆の分化は、コンクールよりはるか前、薩摩の圧政説が強調されはじめる1920年代以前からあったことであろう。

奄美では確かに「元ちとせ現象」で三味線を手にする子どもが増えた。一方で、「マネージャー」や「支部」をもつシステム化されたシマウタ教室も誕生し、三味線の「楽譜」も作られるなど伝承のスタイルも変化した。商業原理の導入により、それまでなかった練習への「参加費」や「流派」も誕生する。無論、「流派」に関して奄美の人々は容認していない。

伝統文化が見直される一方で、シマウタとそれを取り巻く環境は変化し続けている。伝統的に培われてきた即興性という柔軟性は「新シマウタ」の誕生や、ギターやドラムと三味線とのコラボレーションも歓迎している。それは「ウタは変わっていくからこそ生きている」からである。しかし最も変化したのは前述のように、「参加費」を必要とするシステム化されたシマウタ教室や「流派」など、コンクールで「正統的」と見做されているシマウタとそれを取り巻く環境の方であるのかもしれない。

5. 再び、本土で

鹿児島市三和町とその周辺地域は奄美出身者が多く住む地区である。このレポートが読まれる頃には終了しているが11月3日、笠利

の郷友会（同郷組織）である大笠利親睦会が6年ぶりに伝統行事「餅貫い踊り」を真砂町から始まり三和町、新栄町の二十か所で行う。郷里の笠利を離れ、移り住んだ出身者たちが異郷の地で「よりどころ」を再生するのである。先日、準備のための役員会に同席を許された。婦人部や区長、演芸部等の役員組織は一見、町内会を思わせる。踊り、ウタ、三味線、チヂン（太鼓）とメンバーにも事欠かない。

筆者の所属する地域政策科学専攻の必須科目の共同研究「プロジェクト研究」の「地域計画づくりと住民」班では今回、この「餅貫い踊り」を中心に、郷友会の「よりどころ」再生を調査する。来年2月の報告会に期待されたい。

参考文献

指宿良彦：『大人青年（ふっちゅせね）－万年青年－』，2004

南日本新聞社：『島唄の風景』，2003，南日本新聞社



八月踊り（鹿児島市民文化ホールにて）